

# 保育実践における器楽表現活動の現状と課題

細田淳子<sup>1</sup>，香曾我部琢<sup>2</sup>，上田敏丈<sup>3</sup>

<sup>1</sup>東京家政大学，<sup>2</sup>宮城教育大学教育学部家庭科教育講座，<sup>3</sup>名古屋市立大学

本研究では、現在の保育実践において、保育者が日常的にどのように器楽表現活動を展開しているのか、その現状と課題を明らかにし、それらの知見をもとに将来の器楽表現活動の在り方について検討を行う。具体的には、保育実践における器楽表現活動の頻度について、現職教育経験や保育経験年数、園の楽器環境などの項目について、SPSSを用いて重回帰分析を行う。その結果、「器楽日常頻度」を高める要因として、初任群では、「器楽効力感」と「歌唱日常頻度」が示され、中堅群では「行事多」が明示された。さらに、熟達群では「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」、「楽器自由使用」が、全体では「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」、「楽器自由使用」、「行事の多さ」が要因となることが明らかにされた。

キーワード：器楽表現、音楽、保育、重回帰分析、頻度

## 1. 問題と状況

### 1.1 現場で求められる音楽的な技能

平尾(2017)[1]は、教育実習後の大学生に対して、実習先の園の生活の中で音や音楽がどのように使用されていたのか、質問紙調査を実施し、朝や帰りの会、運動会や誕生会、昼食や片付けなどの行事や一斉の活動場面、場面の切り替わり時においてよく歌唱の活動が用いられていることを明らかにした。中野ら(2012)[2]も、保育現場で必要とされる音楽能力について、幼稚園や保育園に対して質問紙調査を行い、「平易な弾き歌いができること」、「楽曲のアレンジ能力」に多くの要望が寄せられたことを示し、歌唱活動において必要とされる音楽的な技能が現場から求められていることを示唆した。平石(2014)[3]が、保育現場からピアノ演奏能力とコードへの理解、発達に応じた歌唱指導の重要性を指摘されていることを示していることから、保育実践における幼児の歌唱活動比重の大きさが理解できる。

### 1.2 現場で求められる音楽的な技能

ゆえに、保育者として就職する際に、採用する条件として「ピアノの技能の高さ」、「弾き歌い」は採用の大

きな要因の一つとなることが示され(新海, 2012[4])、そのため、保育者養成校の音楽教育ではピアノや歌唱への指導が中核となって進められてきた。ピアノ演奏と歌唱指導への教育内容が重視される一方で、ピアノ以外の楽器の演奏や鑑賞などといった教育内容については、そのほとんどがピアノ演奏指導に代替えされるか、捨象されたきた(澤田, 2018[5])。出口(2014)[6]は、器楽合奏について、「子どもの表現意欲や自由な発想を損なうこと」がないように指導するためには保育者の力量が問われる難しい活動と述べている。そして、器楽を演奏するだけでなく、子どもへの理解や環境に即した創意工夫が必須となると示している。

器楽指導の重要性が示されてきたものの、マーチングや器楽合奏以外での楽器を用いた表現活動については、先行研究は山口(2018)[7]と渋谷(2013)[8]の「打楽器あそび」の研究や横井(2010)[9]の幼児の叩く行為に着目した研究が見られるのみで、ピアノや器楽合奏以外の器楽指導については研究の俎上に載せられず、保育実践における器楽表現活動の実相も明らかにされてこなかった。

## 2. 目的

そこで、本研究では、現在の保育実践において、保育者が日常的にどのように器楽表現活動を展開しているのか、その現状と課題を明らかにし、それらの知見をもとに将来の器楽表現活動の在り方について検討を行う。

## 3. 研究方法

本研究では、保育実践における楽器を用いた音楽表現活動の実態について、質問紙調査によってその実相を明らかにしようと考えた。

### 3.1 質問項目作成の手続き

まず、表1に示したように、協力者の基本属性について7項目を設定した。まず、横井(2003)[10]は経験年数の浅い保育者が幼児への器楽表現の指導に困難性を強く感じているデータを示している。そこで、経験年数と器楽表現活動の頻度と関連すると考えられたので「経験年数」を設定した(横井,2003[10])。また、楽器を用いた表現は年長児に多くみられるため「担当クラス」を設定し、また、所属する園における器楽表現活動を用いた行事の有無が日常的な器楽表現活動に影響を与えることを考えて「年間の園での器楽行事の回数」を設定した。さらに、園での器楽表現の環境構成も日常的な器楽表現に影響を与えると考えられるため、ECERS-3の項目19「音楽リズム」から「3.1 観察期間中、最低25分は、子どもは少なくとも3種類の音楽の遊具／教材に触れている。(例:簡単な楽器:音楽の遊具:CDプレーヤーなど:適切な音楽が流れるラジオ)」と「5.1 子どもが自由遊びの間に1時間は多くの音楽の遊具／教材に触れている。」の環境構成に関する尺度を2項目選定し、「楽器使用自由性」、「楽器多様性」とした(T,Harms, et al.2015[11])。最後に、保育者個人の器楽表現の経験について、養成校での器楽表現活動の指導方法について指導を受けた経験を「養成期講習経験」と

設定し、さらに、現職期での器楽表現活動の指導方法に関する講習受講の経験について「現職期講習経験」とした。

以上、7項目についてはさらにその項目に応じて分類を行った。経験年数は、高濱(2000)をもとに2-4年群を初任群、4-10年を中堅群、11年以上を熟達群と設定した。担当クラスは3歳児、4歳児、5歳児とその他で4群に、行事回数は年1回群と年複数群、そして行事無群の3分類、他の4項目は有り・無しで2分類とした。

### 3.2 説明変数の決定とその手続き引

本研究では、目的変数として保育実践における器楽表現の日常的な頻度「器楽日常頻度」を設定している。そこで、目的変数を予測する説明変数として以下のように設定した。小柳ら(2013)[12]は、音楽嗜好性の脳波を用いたシステム開発において日常の嗜好性と主観的な嗜好性との関連を示しているように、保育者個人の器楽表現に対する嗜好性が高ければ器楽表現の頻度が増すと考え、その嗜好性を「器楽嗜好性」とした。また、平澤(2009)[13]が幼児の器楽指導では保育者の音楽の基礎力の重要性を示しており、さらに、横井(2003)は器楽表現の指導への理解力不足が自信の無さを生じさせ、幼児を援助する指導できるという保育者の効力感が高ければ頻度が増すと考え、「器楽効力感」とした。また、器楽表現の頻度は、保育者個人だけで増減するだけではなく、園の状況や環境も影響を与えると考え、毎年開催される器楽表現を用いた行事との関連付ける度合いが日常の器楽表現の頻度を増大させるのではないかと考え「器楽行事関連度」とした。さらに、園の器楽表現の行事への負担感が日常的な頻度を減少させると考えて「行事負担度」を設定した。

最後に、器楽表現と歌唱表現との関連性を明らかにするために、歌唱表現活動の日常的な頻度を「歌

唱日常頻度」とし、歌唱行事と日常的な歌唱活動を関連付ける度合いを「歌唱行事関連度」と設定した。以上、7項目を5件法を用いて評価を行った。

### 3.3 分析方法の選定について

本研究では、「器楽日常頻度」の要因について、保育者個人の心理的な側面と器楽表現のスキルや知識、保育者を取り巻く園の環境や、所属する園の器楽表現を用いた行事の在り方や進め方など社会的状況を含めて明らかにする。そこで、基本属性については、t検定と分散分析(一元配置分散分析, One-way ANOVA)を用い、「器楽日常頻度」を目的変数として、他の14項目を説明変数とする重回帰分析を用いることとした。重回帰分析では、器楽・歌唱表現の活動に関する7項目に加えて、「養成講習有」と「現職講習有」、「楽器多種保有(ECERS-3 器楽環境 01)」、「楽器自由使用(ECERS-3 器楽環境 02)」をダミー変数として分析を行った。の統計分析には、IBM社製 SPSS Statistics 24を用い、有意水準は5%とした。

また、近年p値はサンプルサイズによって有意差が出やすいことが指摘され、実質的効果を測定する効果量を示すことの妥当性が指摘されてきた。そこで、水本ら(2008)[13]に基づいて、t検定についてはCohen's d(Cohen, 1988)[14]、分散分析については $\eta^2$ (eta squared, イータ二乗)を用いた。

## 4. 結果と考察

保育者328名に質問紙を配布して、328名から回答を得て、質問項目に欠損がない258名を分析対象とした(有効回答率78.7%)。

### 4.1 研究対象者の概要

研究対象者の基本属性を表1に示した。性別は、全員女性であったため表1には記載していない。3歳児担任97名、4歳児担任61名、5歳児担任73名、その他は0~2歳までの担任と主任、副主任、フリーな

どであった。経験年数は、初任群20名、中堅群108名、熟達群130名であった。園の社会的状況と環境について、研究対象者の年間の園で開催している器楽表現を用いた行事が1回群は173名、複数回群は66名、行事無し群は18名であった。

### 4.2 担当クラス(年齢)別による器楽・歌唱活動の違い

器楽・歌唱表現の活動項目について、担当クラスによる違いを検討した結果、「器楽行事関連度」と「歌唱行事関連度」に5%水準で有意な差が見られ、とくに「器楽行事関連度」については中程度の効果量も見られた(表2)。効果量については、「器楽嗜好性」と「器楽効力感」、「器楽日常頻度」にも小さい効果が見られた。図1を参照すると、年齢が上がるとともに「器楽行事関連度」が高くなることが示された。

### 4.3 経験年数による器楽・歌唱活動の違い引用

次に、経験年数群による器楽・歌唱表現の活動項目について、その差異を検討する。その結果、経験年数によって「器楽効力感」に5%水準で有意な差があることが示され、小さいが効果も見られた(表3)。また、「行事負担度」と「器楽行事関連度」、「歌唱行事関連度」においても小さい効果が見られた。

経験群では、分散分析の結果では「器楽日常頻度」との関連性が示されなかった。そこで、各項目間の相関を分析した。その結果、表4に示したように、初任群では1項目「器楽効力感」、中堅群は2項目「器楽行事関連度」と「歌唱行事関連度」、さらに熟達群では2項目、「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」との正の相関が存在することが示された。そして、項目全部の相関を概観すると、初任群では2項目しか相関しないのに対して、中堅群・熟達群では9項目に増加していることが明らかにされた。

相関の分析結果から、初任群から中堅・熟達群にかけて、「器楽日常頻度」に項目が増加することが示

された。そこで、経験群ごとに重回帰分析を行い、その経験年数による要因の違いを明らかにしようと考えた(表 5)。その結果、有意な標準偏回帰係数として、初任群では、「器楽効力感」と「歌唱日常頻度」が高いと「器楽日常頻度」が高くなることが示され、中堅群では行事が年に複数回開催されている「行事多」に有意な差が見られた。さらに、熟達群では、「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」、「楽器自由使用有」が有意な標準偏回帰係数であることが明らかとなった。

#### 4.4 年間の器楽行事の開催回数別による違い

中堅群と全員群において、器楽表現による行事の多さが「器楽日常頻度」の要因となることが示された。そこで、年間の器楽表現の行事回数群ごとに各項目について分散分析を行った。その結果、表 6 に示したように、「器楽日常頻度」と「器楽行事関連度」、「歌唱行事関連度」に有意な差が見られ、小から中の効果量も見られた。

#### 4.5 楽器環境による違い

また、重回帰分析の結果、熟達群と全員群において、「楽器自由使用有」が有意な標準偏回帰係数であることが示された。そこで、「楽器自由使用」の有・無群における各項目について t 検定を行った(表 7)。その結果、表 2 のように有意な差が見られたのは「歌唱日常頻度」のみであったが、効果量については、「器楽好感度」、「器楽援助度」、「歌唱日常頻度」、「器楽行事関連度」が小さい効果が示され、「器楽日常頻度」が中程度の効果が明らかにされた。

さらに、「楽器多種保有」の有・無群における各項目について t 検定を行った(表 8)。その結果、有意な差が認められた項目は無く、「器楽行事関連度」のみに小さい効果が示された。

#### 4.6 器楽表現指導の経験の有無による違い

最後に、「養成講習経験」と「現職講習経験」の有・無群における各項目について t 検定を行った(表 9、10)。

「養成講習経験」では「器楽行事関連度」において有意な差が示され、小さい効果が認められた。「現職講習経験」では、「器楽効力感」において有意な差が示され、「器楽効力感」と「器楽日常頻度」において小さな効果があることが明らかになった。

### 5. 総合考察

これまで示した t 検定、分散分析、重回帰分析、効果量の結果の中で、「器楽日常頻度」と関連する知見をまとめると、

- a. 担当クラスの年齢が上がるのに応じて「器楽日常頻度」が高まる効果が小さいが示された。
- b. 「器楽日常頻度」は、初任群では 1 項目「器楽効力感」、中堅群は 2 項目「器楽行事関連度」と「歌唱行事関連度」、さらに熟達群では 2 項目、「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」との正の相関が存在することが明らかになった。
- c. 「器楽日常頻度」を高める要因として、初任群では、「器楽効力感」と「歌唱日常頻度」が示され、中堅群では「行事多」が明示された。さらに、熟達群では「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」、「楽器自由使用」が、全体では「歌唱日常頻度」と「器楽行事関連度」、「楽器自由使用」、「行事の多さ」が要因となることが明らかにされた。
- d. 年間における器楽表現による「行事の多さ」に応じて、「器楽日常頻度」が高くなることが示された。
- e. 現職期の器楽表現に関する指導法の講習経験は、「器楽日常頻度」に小さな効果を与えることが示された。

以上、5つが示された。

#### 5.1 保育者の日常的な器楽表現活動の頻度を高めるには

本研究の知見から、保育者が行事と日常的に器楽表現の活動を強く関連づけており、保育実践におけ

る器楽表現活動が行事のために行われている現状が明らかにされた。とくに、経験年数に着目すると、初任群では器楽表現への効力感との正の相関と回帰、歌唱の日常的な頻度との正の回帰が見られたが、中堅・熟達群では、年間での器楽表現を用いた行事の多さや関連付けが正の回帰であることが示された。つまり、保育者は初任の時期は保育者が自らの持つ音楽的な能力や知識を発揮する機会として日常的な器楽表現を行っている。それが、熟達していく過程で、次第に器楽表現は器楽表現の発表会のために行う活動となっていることが示されたのである。

担当クラスの年齢が上がるほど、日常的な器楽表現の頻度が高まっていることが知見として示されているが、発表会では年長になるほど楽器を用いた発表が多く、年少や年中は歌唱や手拍子などの歌唱やリズムなどの音楽表現が多くみられることから、器楽表現が発表会のために日常的に行われている現状は明らかである。

## 5.2 保育者の器楽表現の経験知と器楽表現の講習、研修の在り方

器楽表現の指導法については、現職期の器楽表現の指導法についての講習会の受講経験が、日常

の器楽表現の頻度に小さいが効果を与えていることが示された。養成期での器楽表現指導法の受講経験については有意な結果は得られなかったが、経験群ごとの重回帰分析の結果から、初任群では器楽表現を幼児に援助する能力と知識が「器楽日常頻度」を高める要因となっていることが明らかにされた。つまり、養成期において器楽表現の指導法について学び、初任期から「器楽効力感」が高い状況にすることの重要性が示されている。

さらに、熟達群において「器楽日常頻度」を高める要因として「楽器自由使用」が示されたが、楽器を自由に演奏できる環境構成を行うためには、楽器が持つ特性や奏法など保育者に音楽的な知識が求められると想定できる。すなわち、「器楽日常頻度」を高めるためには、保育者個人の音楽的な能力と知識を養成期だけでなく、現職期においても器楽表現の指導方法に関する研修や講習を継続的に行うことが必要であると考えられるのである。しかしながら、表1に示したように実際には現職期において器楽表現の指導法についての講習を受講した経験した保育者は半分に満たない状況である。発表会のための器楽表現活動に陥らず、本当の意味で日常的な器楽表現の頻度

表1 研究協力者の基本的属性(※性別は全員女性)

	3歳児	4歳児	5歳児	その他	合計
担当クラス	97	61	73	27	258
	初任群	中堅群	熟達群		合計
熟達度	20	108	130		258
	年1回	年複数回	行事無		合計
行事回数	173	66	18		258
	有群	無群			合計
ECERS-3 器楽環境 01	66	192			258
ECERS-3 器楽環境 02	115	143			258
養成期講習経験	141	117			258
現職期講習経験	115	143			258

を高めるためには、園での研修体制の在り方が今後の課題となると考えられる。

表2 担当クラスにおける各項目の平均と標準偏差, 分散分析の結果

	3歳児群(N=97)		4歳児群(N=61)		5歳児群(N=73)		その他群(N=27)		F 値	P 値	$\eta^2$
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.65	1.12	3.51	1.22	3.53	1.23	3.04	1.16	1.91	ns	.02
器楽効力感	3.08	0.93	3.15	0.91	2.99	0.94	2.78	0.80	1.17	ns	.01
行事負担度	3.20	1.11	3.20	1.11	3.19	1.05	3.26	1.13	0.03	ns	.00
器楽日常頻度	3.07	1.15	3.21	1.24	3.25	1.23	2.74	1.29	1.35	ns	.02
歌唱日常頻度	4.79	0.61	4.74	0.85	4.70	0.76	4.67	0.68	0.35	ns	.00
器楽行事関連速度	3.16	1.36	3.30	1.31	3.51	1.32	2.33	1.18	5.32	<b>p&lt;.05</b>	.06
歌唱行事関連速度	4.06	1.27	3.93	1.33	4.38	1.02	3.33	1.59	4.80	<b>p&lt;.05</b>	.05

$\eta^2$ 値 .01≤小、.06≤中、.14≤大

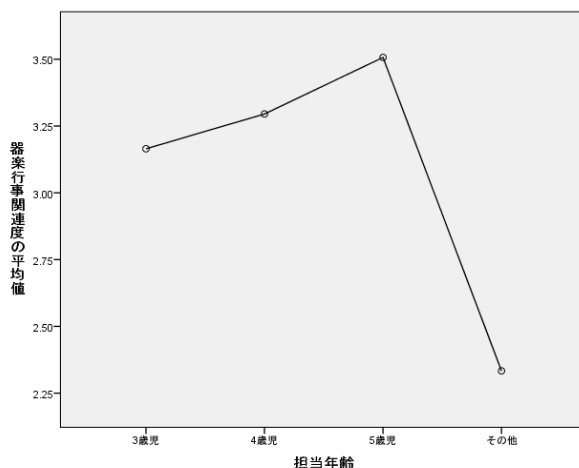


図1 器楽行事関連速度

表3 経験年数における各項目の平均と標準偏差, 分散分析の結果

	初任群(N=20)		中堅群(N=108)		熟達群(N=130)		F 値	P 値	$\eta^2$
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.45	1.19	3.47	1.23	3.57	1.15	0.23	ns	.00
器楽効力感	2.75	0.79	2.93	0.94	3.18	0.89	3.35	<b>p&lt;.05</b>	<b>.03</b>
行事負担度	3.45	0.76	3.26	1.18	3.12	1.05	1.08	ns	.01
器楽日常頻度	3.00	1.03	3.10	1.20	3.16	1.26	0.19	ns	.00
歌唱日常頻度	4.65	0.75	4.71	0.77	4.78	0.67	0.40	ns	.00
器楽行事関連速度	2.95	1.19	3.31	1.43	3.16	1.31	0.72	ns	.01
歌唱行事関連速度	4.10	1.21	4.15	1.24	3.95	1.33	0.69	ns	.01

$\eta^2$ 値 .01≤小、.06≤中、.14≤大

表4 熟達別各項目間の相関

	器楽 好感度	器楽 援助度	行事 負担度	器楽 日常頻度	歌唱 日常頻度	器楽 行事関連度	歌唱 行事関連度
器楽嗜好性	—	.351	-.061	-.129	-.050	.276	.150
器楽効力感	<b>.450**</b>	—	-.154	<b>.457*</b>	.112	.267	.304
行事負担度	<b>-.299**</b>	<b>-.436**</b>	—	0.000	-.079	.143	-.338
器楽日常頻度	.045	.159	.131	—	.207	-.302	-.212
歌唱日常頻度	.154	.137	.000	.151	—	.394	<b>.566**</b>
器楽行事関連度	<b>.253**</b>	<b>.211*</b>	.008	<b>.320**</b>	<b>.207*</b>	—	.442
歌唱行事関連度	.186	.169	-.033	<b>.282**</b>	<b>.413**</b>	<b>.526**</b>	—

右上:初任群, 左下:中堅群 \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

	器楽 好感度	器楽 援助度	行事 負担度	器楽 日常頻度	歌唱 日常頻度	器楽 行事関連度	歌唱 行事関連度
器楽嗜好性	—	<b>.450**</b>	<b>-.303**</b>	.129	.145	.098	<b>.178*</b>
器楽効力感	<b>.444**</b>	—	<b>-.467**</b>	.161	.053	<b>.214*</b>	.143
行事負担度	<b>-.289**</b>	<b>-.444**</b>	—	-.079	-.062	-.087	-.035
器楽日常頻度	0.078	<b>.179**</b>	0.015	—	<b>.226**</b>	<b>.422**</b>	.152
歌唱日常頻度	<b>.136*</b>	0.104	-0.037	<b>.192**</b>	—	.129	<b>.342**</b>
器楽行事関連度	<b>.178**</b>	<b>.210**</b>	-0.031	<b>.336**</b>	<b>.183**</b>	—	<b>.501**</b>
歌唱行事関連度	<b>.176**</b>	<b>.150*</b>	-0.043	<b>.180**</b>	<b>.382**</b>	<b>.507**</b>	—

右上:熟達群, 左下:全員 \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表5 熟達度の違いにおける器楽日常頻度の重回帰分析

器楽日常頻度	初任群(N=20)			中堅群(N=108)			熟達群(N=130)			全員		
	VIF	β	t値	VIF	β	t値	VIF	β	t値	VIF	β	t値
器楽嗜好性	1.89	-.09	-.39	1.37	-.12	-1.23	1.36	.07	.78	1.30	-.05	-.74
器楽効力感	<b>1.84</b>	<b>.67</b>	<b>2.84*</b>	1.61	.11	1.06	1.61	-.01	-.11	1.53	.12	1.72
行事負担度	2.10	.08	.33	1.34	.14	1.39	1.33	.00	.01	1.28	.08	1.25
歌唱日常頻度	<b>2.10</b>	<b>.60</b>	<b>2.36*</b>	1.29	.09	.97	<b>1.20</b>	<b>.20</b>	<b>2.38*</b>	<b>1.20</b>	<b>.15</b>	<b>2.46*</b>
器楽行事関連度	1.78	-.47	-2.03	1.59	.15	1.37	<b>1.46</b>	<b>.43</b>	<b>4.66***</b>	<b>1.47</b>	<b>.27</b>	<b>4.02***</b>
歌唱行事関連度	3.09	-.61	-1.98	1.66	.09	.78	1.56	-.16	-1.66	1.56	-.05	-.66
養成講習有	6.29	.15	.34	1.12	.01	.09	1.09	-.12	-1.52	1.08	-.07	-1.22
現職講習有	2.14	-.08	-.30	1.07	.00	-.04	1.20	.14	1.62	1.11	.09	1.48
楽器多種保有	2.29	.12	.45	1.19	.01	.10	1.12	.00	-.05	1.12	-.01	-.18
楽器自由使用有	1.76	-.17	-.73	1.15	.03	.36	<b>1.27</b>	<b>.21</b>	<b>2.44*</b>	<b>1.13</b>	<b>.15</b>	<b>2.45*</b>
行事多	1.64	.10	.44	<b>1.28</b>	<b>.40</b>	<b>4.13***</b>	1.04	.10	1.23	<b>1.07</b>	<b>.21</b>	<b>3.65***</b>
R <sup>2</sup>	.76			.31			.31			.22		
Adjusted R <sup>2</sup>	.42			.23			.25			.19		
AIC	38.625			314.94			388.65			775.05		

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

η<sup>2</sup>値 .01<小、.06<中、.14<大

表 6 年間の器楽行事の回数における各項目の平均と標準偏差, 分散分析の結果

	年 1 回群(N=173)		年複数群(N=66)		無し群(N=18)		F 値	P 値	$\eta^2$
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.50	1.21	3.74	1.07	3.00	1.19	2.98	ns	<b>.02</b>
器楽効力感	3.00	0.91	3.24	0.84	2.72	1.07	2.90	ns	<b>.02</b>
行事負担度	3.20	1.09	3.14	1.04	3.39	1.24	0.38	ns	.00
器楽日常頻度	2.94	1.14	3.63	1.21	3.06	1.39	8.09	<b>p&lt;.001</b>	<b>.06</b>
歌唱日常頻度	4.76	0.70	4.73	0.73	4.56	0.86	0.68	ns	.01
器楽行事関連度	3.23	1.30	3.52	1.36	1.94	1.11	10.26	<b>p&lt;.001</b>	<b>.08</b>
歌唱行事関連度	4.09	1.26	4.26	1.19	3.00	1.41	7.31	<b>p&lt;.01</b>	<b>.05</b>

$\eta^2$  値 .01<小、.06<中、.14<大

表 7 保育における楽器自由使用経験と各項目の平均と標準偏差、t 検定の結果

	使用群(N=173)		無し群(N=66)		t 値	P 値	d
	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.75	1.03	3.48	1.21	1.34	ns	<b>.24</b>
器楽効力感	3.30	0.99	2.99	0.90	1.97	ns	<b>.33</b>
行事負担度	3.05	1.18	3.23	1.07	-.96	ns	.16
器楽日常頻度	3.71	1.18	3.01	1.19	3.41	ns	<b>.59</b>
歌唱日常頻度	4.90	0.50	4.71	0.75	2.02	<b>p&lt;.01</b>	<b>.30</b>
器楽行事関連度	3.60	1.34	3.13	1.35	2.02	ns	<b>.35</b>
歌唱行事関連度	4.13	1.26	4.03	1.29	0.42	ns	.08

表 8 楽器の保有種類の違いにおける各項目の平均と標準偏差、t 検定の結果

	多種群(N=66)		少种群(N=192)		t 値	P 値	d
	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.48	1.15	3.53	1.20	-0.27	ns	.04
器楽効力感	3.12	0.95	3.01	0.90	0.85	ns	.12
行事負担度	3.23	1.17	3.19	1.06	0.22	ns	.03
器楽日常頻度	3.20	1.24	3.10	1.20	0.58	ns	.08
歌唱日常頻度	4.73	0.71	4.74	0.73	-0.17	ns	.02
器楽行事関連度	3.50	1.34	3.10	1.35	2.06	ns	<b>.30</b>
歌唱行事関連度	3.95	1.34	4.08	1.27	-0.67	ns	.10



表9 養成期に器楽講習経験の有無と各項目の平均と標準偏差、t検定の結果

	有り群(N=141)		無し群(N=117)		t 値	P 値	d
	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.60	1.13	3.42	1.25	1.23	ns	.16
器楽効力感	3.11	0.88	2.95	0.95	1.44	ns	.18
行事負担度	3.18	1.03	3.22	1.16	-.28	ns	.03
器楽日常頻度	3.14	1.16	3.10	1.27	.29	ns	.04
歌唱日常頻度	4.79	0.62	4.68	0.83	1.29	ns	.16
器楽行事関連度	3.38	1.38	3.00	1.30	2.25	<b>p&lt;.05</b>	<b>.28</b>
歌唱行事関連度	4.14	1.26	3.93	1.31	1.31	ns	.16

d 値 .20<小、.50<中、.80<大

表10 現職期に器楽講習経験の有無と各項目の平均と標準偏差、t検定の結果

	有り群(N=141)		無し群(N=117)		t 値	P 値	d
	平均値	SD	平均値	SD			
器楽嗜好性	3.57	1.13	3.48	1.23	.66	ns	.08
器楽効力感	3.17	0.94	2.93	0.89	2.14	<b>p&lt;.05</b>	<b>.27</b>
行事負担度	3.22	1.10	3.19	1.09	.209	ns	.03
器楽日常頻度	3.28	1.22	2.99	1.20	1.91	ns	<b>.24</b>
歌唱日常頻度	4.72	0.80	4.76	0.65	-.37	ns	.05
器楽行事関連度	3.34	1.30	3.10	1.39	1.43	ns	.18
歌唱行事関連度	4.15	1.21	3.97	1.34	1.14	ns	.14

d 値 .20<小、.50<中、.80<大

## 6.課題と展望

文部科学省(2018)[16]は、幼稚園教育要領解説園において行事の重要性について示している一方で、「結果やできばえを重視し過ぎたりすることのないよう」と配慮を促しているように成果主義になりがちな状況を危惧している。また、高平ら(2015)[17]は初任時において行事の多さが職務上の困難さとして保育者から示されている事例を示し、行事が多くなることによって保育者の仕事量が多くなる危険性を示唆している。以上の理由から、これまでの行事のための器楽

表現活動とするのではなく、日常的に幼児が器楽表現減を楽しむなかで発表会へとつなげていくような環境構成や援助の在り方についてさらに研究を進めていく必要があると考えられる。とくに、養成期だけではなく、現職期も含めた器楽表現の指導法についての継続的な研修体制を整備することで、本当の意味での日常的な器楽表現活動を展開することが可能になるのでないだろうか。今後、保育者の現職研修にアウトリーチしていくことで、器楽表現の日常化の在り方について研究を進めていきたい。

## 7. 引用文献

- [1] 平尾憲嗣・滝沢ほだか:保育者養成における幼児音楽の学びについてー幼稚園実習における音楽の活動に着目してー, 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 研究紀要 (50), pp.57-65(2017).
- [2] 中野研也・河野久寿:保育現場で必要とされる音楽能力と、幼児音楽教育との関連, 仁愛女子短期大学研究紀要 (44), pp.71-78 (2012).
- [3] 平石葉子:幼稚園、保育所から保育者養成校に求められている音楽教育, 奈良保育学院研究紀要 16, 平石 pp.81-90(2014).
- [4] 新海節:保育者養成校におけるピアノ教育, 藤女子大学紀要 49, 第Ⅱ部, pp.147-153(2012).
- [5] 澤田:器楽授業におけるピアノ練習法の指導についての考察:保育士、幼稚園、小学校教諭の資格取得を目指す学生への練習法指導, 千葉敬愛短期大学紀要 = BULLETIN OF CHIBA KEIAI JUNIOR COLLEGE (40), pp.149-158(2018).
- [6] 出口雅生:保育者養成課程における音楽科の教授に関する一考察, 浦和論叢 (50), pp.43-61 (2014).
- [7] 山口晶子:保育内容 表現(音楽)の実践と考察:幼稚園児との交流活動「打楽器あそび」を通して:音から音楽へ, 保育・教育・福祉研究 = Journal of child care, education and welfare (16), pp.43-57(2018).
- [8] 渋谷るり子:子どもたちの音に対する感じ方と表現についての一考察:楽器あそびの授業実践を通して, 越谷保育専門学校研究紀要 (2), pp.58-66(2013).
- [9] 横井志保:幼児の叩く活動に関する研究:表現を引き出す活動の流れと方法, 研究紀要 = Nagoya Ryujo (St. Mary's) College annual report of studies 32, 141-146
- [10] 横井志保保育者を目指す学生による器楽活動:幼稚園訪問における表現プログラム. 一宮女子短期大学紀要 44, pp.43-49 (2003).
- [11] T. Harms, R. Clifford, D. Cryer Early Childhood Environment Rating Scale (3rd ed.), Teachers College Press, New York, NY (2015).
- [12] 小柳諒輔、小島昇、夏目季代久:脳波を用いた音楽嗜好性検出システム開発に向けた基礎的研究(非線形問題) 電子情報通信学会技術研究報告 = IEICE technical report: 信学技報 113(69), pp.21-25(2013).
- [13] 平澤節子:「保育現場における器楽指導について」:鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察. 上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報 6, pp.13-20(2008).
- [14] 水本篤、竹内理:研究論文における効果量の報告のために:基本的概念と注意点. 関西英語教育学会紀要『英語教育研究』31, pp.57-66(2008).
- [15] Cohen, J. Statistical power analysis for the behavioral sciences (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Lawrence Earlbaum Associates. (1988).
- [16] 文部科学省 幼稚園教育要領解説 (2018).
- [17] 高平小百合、若月芳浩、佐久間裕之、宮崎豊、工藤亘私立幼稚園教諭における職務上の困難:新任時と現在の分析.論叢:玉川大学教育学部紀要, pp.97-113 (2015).